

ここに幸あり

富田常雄



ここに幸あり



東京文芸社

ここに幸あり 七九〇円

昭和五十年八月三十日発行

著者 富田常雄

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三三六

出張所 東京都新宿区払方町一番地

振替・東京二一七五七

電話・(二六〇)二五五〇

0093-752612-5170

無検印承認

ここに幸あり

目次

波の囁き	五
野花の門	七
紅の手帳	三
二つの道	四
崩れる土	六
湯の町	七
影の中に	八
風の章	九
柿の実	二〇
善意の人	二四

男性の条件 一四〇

星の夜に 一五九

残燈 一六九

赤い風船 一八八

夢に寄せて 二〇二

魅惑 二一四

雪のある富士 二二六

群像 二四二

緑の断層 二五七

装幀 村上 豊

波の囁き

お台場の緑が眼に沁みる様にあざやかに見え、羽田の空港へ降りるのか、舟の上を飛行機が高度を下げながら飛び去って行った。

父は経木の大きな海水帽のひさしを風になぶられながら、向うむきに正絃に胡坐を搔いて二本の竿をしきりに操っていた。

「くたびれちゃった。お姉様、寝かして」

そう言いながら、南子はズボンの足をのばして、背中合せに胴の間に坐わった京子の膝の脇に横になって、秋空を仰いだ。

「飽きちゃったの、南ちゃん」

京子は自分も竿掛けに竿をかけて、父の古のジャンパールのポケットから煙草の箱を出して、登山帽で風を除けながら火を点けた。

「ハゼ釣りで、こんなに当りが無くなっちゃ、ちっとも面白くないわ。あら、お姉様、ごらんなさい。雁が飛ん

でるわ」

と、南子は寝たまま空を指した。鉤かぎの手になって雁の列が空を渡ってゆくのを、京子も仰いだ。

「どの位釣った？ 南ちゃん」

「三十ぐらい」

「妾の方が優秀かな」

京子は絃にかけてある自分の網を覗いた。生きているのが黒く塊かたまりって水のなかに見え、鉤を呑んで彼女に腸まで引っぱり出されたハゼが白く腹を返して浮いていた。

姉妹にとっては生れて始めての釣であった。ハゼならば女子供でも釣れるという父の言葉に飛びついて、今日の日曜日を築地の河岸から、舟を仕立てて、親娘三人で品川の沖に出たが、午前中はよく釣れたが、午後はさっぱり駄目になった。櫓を押しながら、船頭は潮が悪くなったと言ったが、妹の南子は昼の弁当がすんだ頃には竿を上げ下げするのも面倒臭くさくなった。姉の方はそれでも根気よく竿を動かしたが、これも、さっぱり釣れなかった。

「パパ、釣れて？」

と、南子はそのままの姿勢で父の作造に声をかけた。

「うむ」

生返事をしたままで、父は振りむこうともしなかった。

支店長代理として、山井物産のロンドンの店から上海、

青島と勤めて、東京の本店に帰って参予になった。好人物であるための左遷だとも噂されたが、戦後は財閥の解体で物産を辞め、現在は小さな個人商会の会計主任という位置に甘んじていた。姉の京子は結婚一カ月で夫に死なれた戦争未亡人で、これは未亡人というのが可哀そうなほどであった。母は戦争中に死んで、姉妹は父を支えて働いて居た。姉は洋装店に勤め、妹は出版会社に通っていた。親娘三人で釣舟を仕立てて出るなぞは贅沢だったが、姉妹はむしろ、父をなぐさめる気持の方が強かった。

白いモーター・ボートが、彼等の舟の脇を素晴らしい速力で走って行った。ひさしの長い運動帽をかぶり、グレーのジャケットを着た青年が操縦していた。

「ねえ、お姉様、あのひと誰れかに似てないこと、ああそうだわ、ビング・クロスビー。ちょっと、いいわね」

「南子ちゃんたら、船頭さんが聞いているわよ」と、姉は妹をたしなめ、遠くなったボートを眼で追った。

「だって、ええものは、ええ、ふふふふ」

南子は笑いながら、姉の顔を仰いで、小さく欠伸をした。

「あんなボートに乗って見たいな、妾」

「今のボートかね」

渋紙色の顔をした船頭が、櫓を押しながら二人に話しかけた。

「あれは武田自動車の若旦那ですよ、知ってなさるかね」

「知ってるわ」

と、南子が返事をした。

「よくああして乗り廻わしてるだ。頼めば乗せてくれるさね。お嬢さん達は美人だからな。はははは」

「あら、美人でなけりゃ乗せないの」

「どうだかね。まあ、お嬢さん達なら間違ひなく乗せるべいと言うわけだ」

「じゃあ船頭さんに紹介して貰おうか知ら」

「南子ちゃん」と姉は妹の脇を突いてたしなめた。

「はははは、金持の息子なんて暢気なもん^{のんき}だ。日曜日は一日中ああして用もねえのにボートを走らせてるんだからね。まあ、銀座のバーや、ダンス場の女を追ひ廻わしたり、ストリップ・ショウてえのを口をあけて見てるのよりはよかんべい」

「船頭さんは博識ね。それに、英語も使うのね。モダンよ」

と、南子は五十を越した船頭を揶揄した。

「英語の一つもしやべらねえと、息子まで馬鹿にするからね。ストリップというのは息子から教わった。へそを出す踊りだってね」

これには南子も返事をしなかった。

「お前達、もう飽きたかい」

父の作造は両手に竿を持ったまま振り返った。口髭に交った白毛が光った。

「お父様、どの位い釣れました」

京子はやさしい声で訊いた。彼女の声の柔かさから来る感じでもあった。

「一そくと二三十だろ」

「パパ一そくって百のこと？」南子が起き上りながら言った。

「そうだよ」父の顔が笑いに崩れた。

「あら、凄い。天ぶらにしても食べ切れないわね、お正月の甘露煮にとって置けばいいか知ら」

「型が小さいからな。どんなものだろう」

そう言って、作造は竿を置き網をあげて、漁獲物を楽しそうに眺めた。

「飽きたのなら帰ろうかな。南子」

「パパが飽きるまでは待つてよ」

「はははは。きりがないものだよ、釣というのは」船頭は空を仰いでから、父に声をかけた。

「旦那、上がりましょう。いやな雲だ。風になるね」そう言うのと、櫓を引上げて、発動機にかかった。

「でも、漁っていい気持ね、お姉様。それにとってもお腹がすくし」

空は青く、ただ、羽田の方に灰色の千切れ雲が浮いているばかりであった。舟はエンジンの音を立てて走り始めた。

風が出て、白い波頭が沖に立ちお台場の石垣にも白い波がくだけた。舟はひと揺れしたと思った時エンジンがびたりと止った。

「あら、すごい風」

南子は危うく登山帽を飛ばされそうになったのを手で押えて顔をしかめた。姉の京子は揺れる舟の舷に手を置いて、波に煙って見えなくなりかけた沖を、眼を細めて噴めた。

胴の間に戻った父の作造は飛ばされそうな海水帽を脱ぐと、半白の髪を風になぶらせながら、不安そうに空を見廻わした。

船頭は止ったエンジンの調整に懸命になって居たが、容易に直らなかつた。

「疾風だな」と、作造は二人の娘達の方を心配に掩われた表情で見た。

「大丈夫かしら、お父様」

京子は眼をあげて訊いた。

「沈みもしまい」気強く言つて、作造は笑つて見せたが、彼は海の恐ろしさをよく知つていた。空は未だ晴れて日が照つて居たが、ものの十分もたたないで曇るだろう。

雨にならなくても、この疾風は天候異変の前触れである。今まで、舟の周囲に見えた釣舟はすでに一つも見えなかつた。いち早くも帆を立てエンジンをかけて逃げたのであろう。舷に波が泡立ってぶつかり、この小さい釣舟はぐんぐん流され、三角形の波に弄ばれ始めた。

「どうだね、船頭さん。エンジンは」

作造は艫板に両膝をついて、発動機の中に顔を突込んでいる船頭に声をかけたが、相手は答えず、時々、絶望する様に溜息をついては海を眺め廻わした。僚船を見つけようとしていたのであろう。

「お父様、このままだと、どこへ流されるか知れないわ」

と、南子は不安と不服に焦立つて言つた。

「南子ちゃんは泳げるからいいわ」

京子は明るい表情を作つた。

「妾は金槌だから、この舟が沈むと全巻の終りになるわ」

「幾ら泳げたつて駄目よ。口惜しいなあ、眼の前に陸があるのに、東京湾も品川なんぞで溺死なんかするの」

「ほほほ、本気になつてるの、南子ちゃんは」

「妾、吐きそうだわ」

そう言うとき、南子は姉の膝にうつ伏した。

舟の動揺はようやく大きくなり、空は曇つて、海面をひゅひゅと鳴りながら吹きすぎる風はその威力を増すばかりであつた。

「朝出る時は調子がよかったんだが」

船頭はそう言いながら、明瞭に恐怖の浮んでる顔をあげて、波の白く崩れる海を見廻わした。

「どうしても駄目か。かからんのか」

作造は焦々した。若い二人の娘を誘つて、釣りに来て、万一、ここで死なせたらと思う親の本能が頭をもたげた。

「南子ちゃん、しっかりしていてね」

と、姉は妹の耳に口を当てるようにして言つた。南子は力弱く頷いた。舷につかまつていても、姿勢を崩される程の動揺が始まつた。木の葉のように弄ばもてそされるといふ形容が京子の頭に浮んだ。

「お父様、なんとかしてえ」

南子が恐怖の叫びをあげたので、思わず作造と京子は蒼い顔を合わせてお互いの目を見合つた。

不意にエンジンの音がきこえた。

エンジンが動き出したのだと思う喜びに、京子と南子は殆んど同時に顔をあげて、艫の方を見た。が、船頭はもう発動機をあきらめた様に艫に立ち上がっていた。姉妹が首をめぐらした時、先刻のモーター・ボートが白く波を分けて、十メートルほどの横を通り過ぎようとしていた。

「おーい」

と、船頭が大きな声で呼んだ。

「機械がかからねえんだよう」

その声を聞きわけたのであろう、モーター・ボートは大きく船首をまげて、釣舟の回りを一周すると、ハンドルを握って居た青年は素早やく起つて、ロープを投げた。ほとんど、無意識に南子と京子はその綱を宙で受け留めていた。掌の痛さも感じなかった。

船頭が大股に降りて、そのロープを握ると舳^{へそ}に縛りつ

けた。

「お願えます」

青年はその声には答えず、向うむきにハンドルを取っていた。やがて、釣舟は快適なエンジンの音をたてるボ

ートに洩かれて、波を切って走り始めた。それは、親子三人にとつては地獄で仏という言葉通りの、助け舟であつた。風が耳にひょうひょうと鳴り、お台場は波のしぶきに隠れて遠ざかると芝浦港がぐんぐん眼の前に迫つて来た。

「ありがたかつたわ、お姉様、あたし、駄目かと思つてたの」

「ほんとにね」

と、京子は溜息をついた。

「あの方、こうなると、私達のナイト（騎士）みたいなものね」

「ふふ、まさか」

「こう速いと、波なんか、へいちゃらね」

「あんなこと言つて。さっきはまっ蒼だったじゃないの、南子ちゃん」

「救われれば自ら快活よ」

曳船された釣舟は、やがて、月島の岸壁に沿い、お浜離宮の森を正面から、左へ見て、隅田川の河口に入つて行つた。すると、今迄の波は悪夢のように消えて、のたりとしてゆたかな潮が青くふくれていた。

「まあ、失敬ね。ここへ来たら、波なんかないわ」

と、南子は反感を持ったように言つた。

「だから、海の風は怖いんだよ。」

作造も安心したのか、微笑を浮べた。

「船頭さん」

青年がスピードを落して、釣舟の方を振り返った。庇の下、美貌な浅黒い顔には微笑が浮んでいた。南子と京子と、青年の六つの瞳が水を距てて搦んだ。姉妹はそれとない、感謝の会釈をした。

「船宿はどこだね」

「へえ、魚河岸の横手の堀ですが、もう、艀を押しますから、ありがとうござえました」

「いいんだ。同じことだ」

青年は頷いて見せ、再び、釣舟を曳いて隅田川をのぼり始めた。勝閑橋の美しい橋が夕空にくっきりとうかび、聖路加病院の尖塔がきらめいて、左手の魚河岸には幾つかの漁船が入って夕河岸の賑いを見せていた。

釣舟はようやく、船宿の棧橋に着いた。青年はボートをめぐらして、掘割を出て行こうとした。

「おかげで、娘達もほんとに助かったと言って居ます。

有難うございました」

作造はモーター・ボートが狭い掘割のために、釣舟の舷とすれすれになった時、青年に向って、そう言った。

相手は運動帽のひさしに手をかけ、美しい歯を見せて微

笑した。

「海の風は怖いですね。併し、お互いに援け合うというのは海の人間の掟ですから、あたり前の事です」

と、青年は静かな口調であった。

「ほんとに、嬉れしかったんですの、妾、お姉様と、もう死ぬかと思つて」

南子は両手を祈るように合掌させ、大きなセスチュア（身振）をして見せた。

「ははは、貴女方のような美しい御姉妹が品川の海なぞで海底の藻屑になるなぞというのは神様が許さないでしょう」

聞き方によっては気障にも聞える文句であつたが、この青年の口から出ると、それは自然な社交的な言辞になつていた。

「失礼ですが、わしは峯と申します」

作造はそう言いながら、自分の名刺を相手に差し出した。

「あ、これは申しおくれました。僕は武田雄一と言います」

青年は作造の名刺をポケットにおさめて、

「名刺を持って居りませんが、父は芝浦で自動車会社をやつて居ます関係で、こんなボートを走らせるのが好き

で、いつも乗り廻しています」

「面白いスポーツですな、これが姉の京子、これが妹の南子です。どうぞ、よろしく」

父が紹介したので、姉妹は軽く会釈した。

「今度は一ツ、釣舟でなしに、モーター・ボートへ乗って見ませんか。お嬢さん」

雄一は姉妹を半々に噴めながら言った。

「あら、乗せて下さいまして」

と、言ったのは南子であった。京子は口を利かずに微笑だけを浮べて居た。

「いつでも……そうですね。芝浦の会社に来て下さってもいいですが、日曜日にはこうして、築地の河岸にボートを置いています。」武田モーター」ときけばわかります。勝鬨橋の脇です」

「伺いますわ」

「どうぞ、お姉さんと御一緒に乗りに来て下さい。では、失礼します」

モーター・ボートは夕潮の満ちて来た掘割に軽快なエンジン音の響かして、棧橋を離れていった。

棧橋に上がりながら、南子は姉の方を振り向いた。

「今度、行って見ない。お姉様」

「そうね」

と、京子はその静かに答え、足元を注意しながら棧橋の上に登った。まだ、足元がふらふらして、体が揺れているような錯覚に襲われた。

「モーター・ボートも素敵だけど、あの方の方が、より一層、素敵じゃない？ お姉様」

「マ、南子ちゃんたら」

「今日の釣、とても、楽しかったわ、獲物に富み、冒険あり、スリルあり、たくましく騎士までありで」

姉は妹のはしゃいだ言葉に答えようとせず、網の中のハゼを、差し上げる様にして、夕方の光にすかした。併し妹にもまして京子の気持も弾んでいた。

阿佐ヶ谷の駅で省線電車を降りると、京子は父が肩に掛けている、ふた箱を、代わって自分の肩にかけた。父を労わる気持からであった。

「パパ、妾が釣竿を持つわ」

と、南子は作造から釣竿の袋を受け取って、これも自分の肩にかけた。それは、姉ばかりに孝行されては堪らないと言った無邪気さがあった。

生垣に囲まれた小路を三四町行って、戦災をまぬがれた古い家の並んでいる一角に峯作造の五間ほどのつつましい家があった。

「あらあ、誰れか来てるわ」

南子は家の玄関が見えるところへ来ると、頓狂な声をあげた。隣りの奥さんに留守を頼んで、玄関に鍵をかけて出て来たので、家に灯のついているのが不思議だった。

「欣哉だろ」

と、作造はゆっくりと言った。

「まあ、図々しい。家宅侵入だわ」

「欣哉さんならいいじゃないの。泥棒なら灯なんか点けないし」

京子は妹をたしなめて、木戸を押した。朝早く水を汲んでおいた風呂場の焚口の前に松尾欣哉は、額に下がる髪を掻きあげようとせず、薪の燃える光で本を読んでいた。父の同郷で、京子達が子供の時に出家してから、家に寄宿していたこともある青年であった。現在は新制中学の国文と体操の教師をやっている、京子より一つ上の、二十七歳で、眉の太い、十八貫の体重を持った骨格の逞しい青年であった。

「やあ、お帰りなさい」

欣哉は起ち上がって、木戸から入って来た親娘三人を迎えた。

「やあ、御苦勞様だな」

と、作造は欣哉に礼を言った。

「はははは、暇だったものですから」

「すみません、欣哉さん」

そう言いながら、京子は父の後から縁側に上がった。

「もう、いい、まあ、上がり給え。風呂は娘達がわかすよ」

と、作造は茶の間から欣哉に声をかけた。

南子は欣哉と並んで、焚き口にしゃがんだ。

「ハゼ釣りはどうでした」

欣哉は、本を閉じて南子を見た。

「うんと釣ったわ。これから天ぶら作るから食べさせてあげてよ」

「ありがとう」

「どうして、留守なんかいらっしやったの」

「下宿に居ってもつまらんのでね」

「映画を見ればいいじゃないの」

「くたびれるからな」

「お隣りの奥さんに断って入ったの」

「勿論、だから、ハゼ釣りを知ってたじゃないですか」

「あー、そうか、でもね、今日はとても怖かったのよ、風が吹いて。エンジンが止まってしまつて」

「そんな元気で帰って来たんだから、大した事はない」

「まあ、失礼ね。一度は東京湾の藻屑となるかと思つたのよ。そうしたらね。素敵なモーター・ボートに助けら

れて、曳いて行つて貰つたのよ。うれしかったわ。そのモーター・ボートを運転していた人が、武田自動車会社の息子さんだったのよ」

「よかったですな」

欣哉はぼつりと答えた。その癖、別になんの感動も受けている様子がなかった。

「さあーっと波を分けて走つて行く感覚は爽快といわんか、快適といわんか。絵にも現わし難しよ」

「なる程」

「はるかにお台場を後ろにし、かがやく聖路加病院の白い姿は夕映えして、遠く海上から臨むと白聖の議事堂は雲表に聳え」

「はははは、誇張したな」

「と、言うわけで、今日の釣りは大した収穫だったわ」
焚口の焰が二人の顔を赤く照らした。

「南子ちゃん。さあ、ハゼの腸を出すんだから手伝つてよ」

京子はエプロンを着て台所に出て来ると妹にそう声をかけた。

「欣哉さんは何て話しても無感動ね。妾達のハゼ釣りを想像もしてくれないのね」

「いや、大いに想像しとるです」

「ちつとも感心しないなら、天ぶら食べさせないから」

「南子ちゃん」

と、京子は声をきびしくした。

「欣哉さんにお風呂呂まで焚いて頂いて、なにを失礼なこと言つてゐるの」

「はあーい」

南子はようやく縁側から家上がった。姉妹はハゼをこしらえるのにひどく時間がかかった。腸を出すだけならよかったが、大きいのは骨を取らねばならない。小刀で腹を割くのは容易でなかった。

「お姉様、もう、よそうか、面倒くさくなっちゃった。構わないからこのまま揚げちまおうや」

「駄目よ。ごそごそして」

二人の後に欣哉が揚板を鳴らして寄つて来た。

「小父さん、お酒が欲しいと言われますよ」

欣哉は作造をそう言い慣れていた。

「パパにそうは参りませんと言ってよ、欣哉さん。二人でハゼと格闘してゐるんだから」

と、南子は突ッけんどんに答えた。

「はははは、なる程。これは朝までかかる」

欣哉は覗き込んでにやにや笑った。

「まあ、失礼ね」

「僕に貸し給え」

そう言う、南子から小刀を受け取って、電灯にすかした。

「これは駄目だ。京子さん、出刃はありますか」

「あるけど切れないのよ」

「貸して下さい。その砥石も」

と、言い、欣哉は庖丁を受け取ると、ゆっくりと磨きにかかった。

京子はその間に父の酒の支度をした。南子はハゼに飽きて、風呂焚きの方に廻わっていると、急に、姉の大きな声がしたので、台所へ行って見た。欣哉の魚のこしらえ振りは見事で、もう、大半のハゼが綺麗に皿にのせてあった。

「あら、ほんと……欣哉さんの前身は魚屋だったの」

と南子は笑いながら言ったが、欣哉は怒るでもなく、黙って働いていた。

京子は好もしい青年だと思ひ、その無口が何にか貴いものに思えた。

作造は釣りの疲れも手伝ってか酔いの廻り方が早く、欣哉を交えて四人で食卓を囲んだ時には口が軽くなっていた。

「どうだ、松尾、そろそろ結婚しては」

と、作造は箸をおいて徳利を持った京子の酌を受けながら、欣哉を見た。

「早いです」

「早くはないよ。丁度、いい年頃だ」

「中学の教師じゃ、嫁は来んです」

「なあに、共稼ぎすればよからう」

「はあ。併し、女には働かせたくないですなあ」

と、欣哉は恐れ気もなく、京子の前へ四杯目の茶碗を差し出した。

「ふふふ、欣哉さんはなかなかのフェミニスト（女性尊重者）ね」

南子は首を縮めた。欣哉は別に動じた色もなく箸を動かした。

「欣哉さんの様な人と結婚した女の人は幸福ね。お姉さま、働かしたくないと言うんだから、御飯炊きから、雑巾がけまでしてくれるのよ。屹度」

「まさか。欣哉さんの言うのは外へ出て働かしたくないと言うのよ」

「その位だから、女房孝行よ」

「ハゼはうまいですな」

と、欣哉は漠々とした表情で言つて、箸に挟んで天ぶらを宙に上げて見た。